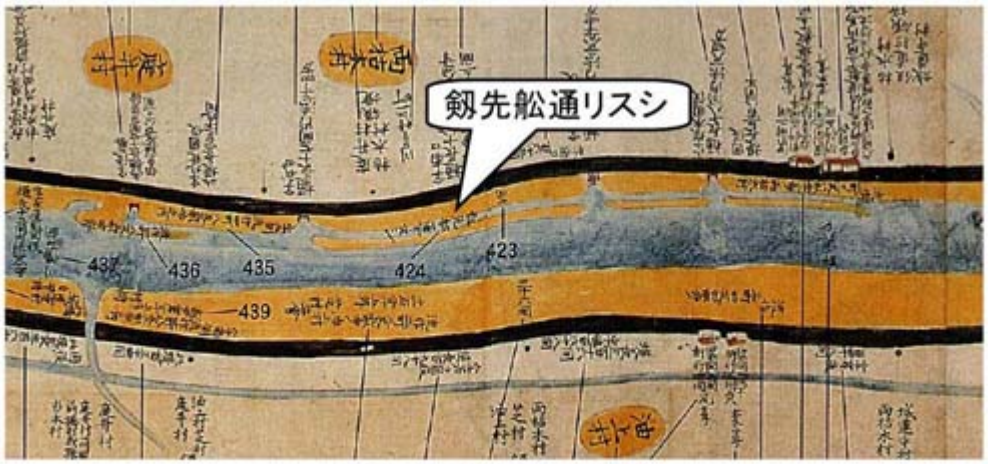
20.河内名所図会を訪ねて　その十四　大和川築留（剣先船②）

4.船曳き

挿絵「大和川築留」は大和川の豊かな流れと、帆走する剣先船を描いています。しかし、実際の風景はどうでしょう。日本の川は長さが短く急勾配なため、降った雨が一気に流れ下るのが特徴といわれます。大和川も大雨が降るとすぐに増水するものの 1、2 日すれば水が引き、少ない流量と浅い水位の普段の姿に戻ります。淀川を基準にして河床勾配を見ると、大和川は 2 倍以上、石川は 5 倍以上あり、川の表情の違いは数字にも表れています（*1）。

水位が下がれば帆走どころではなく、船人が河床を掘って水路を確保する必要がありました。正徳 3 年（1713）の松倉家文書（羽曳野市）によれば、水路確保にかかった費用銀 300 貫目のうち 3 分の 2 近くが「船ひき子」の賃金でした。



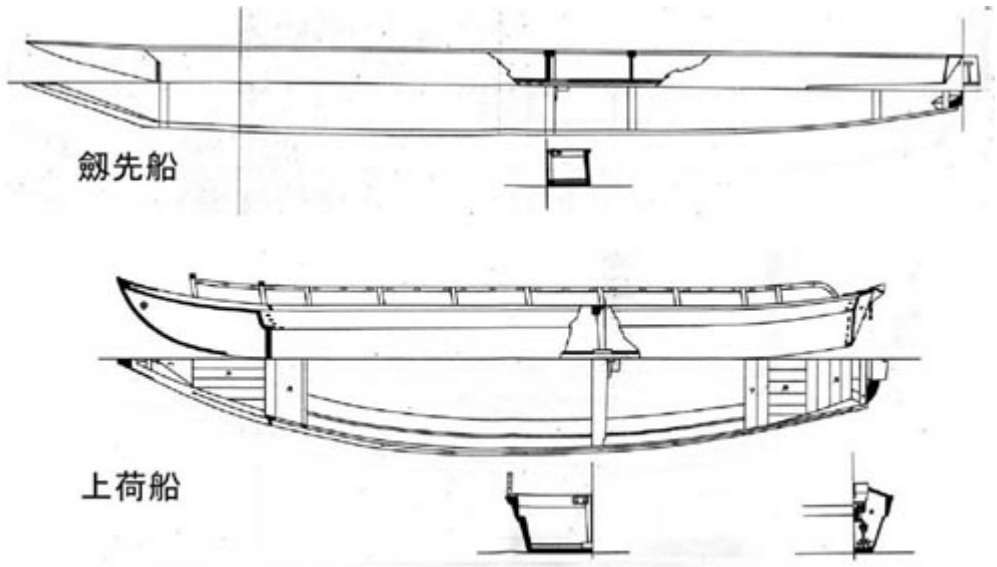
水路『大和川筋図巻』

淀川では平安時代に船を曳いていました（*2）。江戸時代に入ると両岸に船曳場が整備され、八軒屋から出発した三十石船は両岸をジグザグに遡上して伏見へ向かいました（*3）。帆を使って淀川を遡上できる気象条件は、年間 55 日程度（約 15%）しかありません。

ロシア民謡「ボルガの舟歌」は船曳き人夫の労働歌です。洋の東西を問わず、船曳きが川船の日常風景だったと思います。

5.浅川船

剣先船や柏原船の説明に「浅川船」「浅川造り」という言葉が登場します。和船の本に説明は見当たらず、船の種類を指す用語ではなさそうです。柏原市史は柏原船の説明に「剣先船を用いることは不適当なので淀の上荷船を参考として浅川船とした。・・・また、浅川船であったため、板は全面的に薄く、そのため耐用年数はせいぜい 8 年か 9 年・・・」とあります。



剱先船と上荷船『大阪市史 第五』

上図は剣先船と上荷船を同じ縮尺で並べました。ただし、ここに掲載した上荷船は大阪市中の堀川を働き場とする 20 石積の船で、淀上荷船とは別の船です。両船を比較すると①剣先船の船形を秋刀魚とすれば、上荷船は鯖。②船の強度を保つため上荷船は船梁に加えて舳先と船尾に板子（甲板）を付けるが、剣先船は船梁のみで、材は若干細め。③図では分かり難いが剣先船は若干薄い板材を使っている。④断面図は剣先船の箱型に対して上荷船は逆台形。⑤どちらも平底。⑥舷側は剣先船の一枚棚に対して上荷船は二枚棚。

剣先船から見ると、①スマートな船型は船曳きや井路川の往来に有利。②③は軽量化。④⑤は底面積を広くすることで吃水を浅くできる。⑥吃水の制約があるので必要以上の舷側の高さは不要。

浅川船とは水深の浅い川に適した船の総称でしょう。とすれば、浅川造りは浅い吃水を追求するため、頑丈さより軽量化を優先するとともに、船体形状などを工夫した造船手法を指します。

剣先船は浅川船の特徴に加えて、船曳きを考慮したスマートな船形と鋭い舳先を持つ、大和川固有の条件に適した船ということになります。

（2021.7 古川）

*1 淀川:淀川大堰上流では約 1/4,700～1/2,000
大和川:亀の瀬下流付近から河口までは約 1/1,100
石川:佐備川合流点から石川橋までは約 1/400

*2 『類聚三代格』昌泰元年（898）太政官符「摂津国嶋上・嶋下・西成等郡河畔の地、諸国雑物を漕運するの徒、かの縁辺に就いて船舫を牽引す」

*3 『郷土摂津いにしえ通信 第 50 号』
https://www.city.settsu.osaka.jp/material/files/group/43/inisie50.pdf

資料 10 国土交通省河川局 HP『淀川水系河川整備基本方針』2007 年

国土交通省河川局 HP『大和川水系河川整備基本方針』2008 年
大阪府 HP『大和川水系石川ブロック河川整備計画』2016 年
資料 11 堺市立博物館『大和川筋図巻を読む』2004 年
資料 12 『松原市史 第1巻』1985 年
資料 13 『大阪府史 第 2 巻』1990 年
資料 14 淀川資料館『淀の流れ 第 64 号』2002 年
資料 15 『柏原市史 第 3 巻』1972 年
資料 16 『大阪市史 第五』1911 年